

## 初年次教育授業「自立と体験 1」における学習意欲を高める取り組み — ARCS モデルを手掛かりに —

鈴木 浩子\*

### 1. はじめに

明星大学では、2010 年度より全学初年次教育「自立と体験 1」を実施している。この授業は、少人数クラスによるアクティブラーニングを基本とし、体験学習のステップを繰り返しながら学習を進める。つまり、学生が意欲を持って主体的に学習することを前提として組み立てられた授業である。一方必修科目として全 1 年生が受講することから、学生の学習意欲の状態は様々であり、より多くの学生の学習意欲を高める授業をつくっていくことが大きな課題である。

本稿では、ARCS モデル (1) を手掛かりに、現状の授業内容の考察を行うとともに、今後に向けての課題を探っていく。

### 2. 授業の概要

「自立と体験 1」は、1 年生前期の全学共通科目として、学部学科横断の少人数 (30 人) クラスを 70 弱設置し、アクティブラーニング型の授業として実施されている。授業を担当するのは各学部の専任教員で、全学生に一定水準の初年次教育を提供するために、オリジナルの共通ポートフォリオ、共通教案を使用し、担当教員向けには 3 回の説明会・研修会を行っている。シラバスは表 1 のとおり 3 つの節に分かれており、クラスの中に全 7 学部の学生が所属し多様性の中での話し合いを通して学ぶ、体験学習のプロセスを用いて振り返りを通して考えるという点が、主な特徴である。共通ポートフォリオ・共通教案の企画作成、授業の運営は、附属研究機関である明星教育センターが一括して行い、また各部署の職員や上級生 (SA) が授業に関わり、大学全体で初年次教育をつくっている。

表 1. 平成 26 年度「自立と体験 1」授業内容

第一節 人と関わる	1	オリエンテーション
	2	新しい環境で他者と出会う
	3	大学での学びを考える
	4	聴いて相手を理解する (1)
	5	聴いて相手を理解する (2)
第二節 人と関わる・学びのスタートを切る (ローテーション授業)	6	明星大学を知る
	7	明星大学を紹介する
	8	図書館にふれる
	9	大学職員に取材する
	10	自分や相手の大切さを知る
	11	ルールとマナーを考える
第三節 大学生活を見通す	12	卒業生から学ぶ
	13	仕事と自分について考える
	14	これからの大学生活を描く
	15	未来の自分へのメッセージ

\* 明星教育センター 特任准教授

### 3. 授業内容の構成

第一節は、人と関わって学習する体験を重ねる授業内容である。各回の授業は、「個人で考える」⇒「グループで話し合う」という体験を行い、それを振り返るというプロセスで進められる。「振り返り」は、体験を振り返って自分なりの考えをまとめたり、新たな考えを生み出したりするための時間である。第一節では、特にグループでの話し合いと振り返りに重点を置く。また毎回の授業で獲得した学習内容を積み重ねながら、次回以降の授業で実践する組み立てとなっており、例えば5回授業で行う情報カードによる問題解決演習では、1回から4回までに学習した協調的人間関係を構築する、自分の意見を述べる、合意形成をする、発表するなどの学習内容を活用して主体的にグループ活動を行う。

さらに、1回と5回には、学習成果を確認するセルフチェック（「学ぶ力」自己点検）を実施し、授業を通して身に付いた力を可視化し、学生自身が確認できるようにしている。その後の授業内での取り組みに対する目標設定も行い、意識して授業に取り組むことを目指している。

第二節では、第一節の学習内容を実践しながら、さらにグループで主体的に活動を行う。6回、7回では、自校について学習しその情報をもとに高校生に大学を紹介するポスターを作成する。グループでの活動は自主的に行われ、教員の介入は最小限に留められる。また図書館や大学の各部署をグループで訪問し取材を行ったり、演習に取り組むなど、教室を離れて主体的に活動する場面が増える。また、10回のハラスメント、11回のルールとマナーは、様々な考え方のできる複雑なテーマを取り上げて話し合いを行うことで、社会で生きていくためのスキルを意識させる内容である。

第三節は、卒業後を見通しながら、大学生生活の過ごし方を考える。第一節、第二節がグループでの学習を中心にしてきたのに対して、第三節では、個人で考える活動を中心とする。その後ペアやグループで共有し互いにアドバイスすることにより、新たな視点を得て、個人で考えた内容を豊かにすることを目指す。

表2. 平成26年度「自立と体験1」授業詳細<第一節>

	1	2	3	4	5
授業	オリエンテーション	新しい環境で他者と出会う	大学での学びを考える	聴いて相手を理解する(1)	聴いて相手を理解する(2)
実施内容	・自己紹介 ・発表リレー ・体験学習のステップ ・学ぶ力自己点検	・明星大学でやってみたいこと ・一問一答インタビュー ・模造紙作成 ・発表 ・ジヨウリの窓	・大学について考える ・模擬講義を聴く ・ノートの取り方を考える ・ポストイット演習	・聴くポイントを考える ・クローズド質問とオープン質問 ・他者紹介	・情報カードによる問題解決演習 ・学ぶ力自己点検
学修内容	・グループに慣れる ・発言の仕方 ・振り返りと概念化 ・自己目標を立てる	・自分の理想を考える ・異なる他者を理解する ・視野を広げて考える ・話し合ってみる	・大学を意味づける ・ノートテイキング ・情報整理の方法(ブレインストーミング) ・担当教員を理解する	・ポストイットの活用法 ・聞くことと聴くの違いを知る ・他者理解 ・自己を承認する	・合意形成(正解がある場合とない場合) ・実践を振り返る ・自己目標を立てる

表3. 平成26年度「自立と体験1」授業詳細<第二節>

	6	7	8	9	10	11
授業	明星大学を知る	明星大学を紹介する	図書館にふれる	大学職員に取材する	自分や相手の大切さを知る	ルールとマナーを考える
実施内容	・明星大学紹介DVD ・学長講話 ・課外活動紹介DVD ・先輩の話を聴く	・学科の特徴グループ内共有 ・ポスター作成 ・クラス代表決定	・図書館の利用方法説明 ・図書館演習(図書館クイズ・ブックフェッチ)	・大学職員インタビュー ・プレゼン準備・実施 ・報告書作成	・「自分や相手を大切にすること」を考える ・ハラスメントクイズ ・相互承認の演習	・キャンパス内のマナーを考える ・ルールとマナーについて話し合う ・社会的なルール
学修内容	・自校学習の意味理解 ・明星大学の理念・歴史理解 ・充実した大学生活をイメージ	・自校理解 ・自校に対して誇りを持つ ・グループで協力して作品をつくる	・図書館の利用法理解 ・図書館を理解し個人での利用につなげる	・大学職員との交流 ・働くことについて聴き考える ・大学の施設・組織を知る	・自己尊重、他者尊重について理解する ・様々なハラスメントを知る	・ルールやマナーについて考え自分の行動につなげる

表4. 平成26年度「自立と体験1」授業詳細<第三節>

	12	13	14	15
授業	卒業生から学ぶ	仕事と自分について考える	これからの大学生活を描く	未来の自分へのメッセージ
実施内容	・第三節「大学生生活を見通す」について ・卒業生パズル ・卒業生インタビューシート	・職業への興味から考える ・自分の特徴から考える ・「学ぶ力」自己点検	・大学生生活デザインシート記入 ・大学生生活の目標設定	・「10年後の自分への手紙」 ・私の大学生生活宣言 ・授業アンケート
学修内容	・大学生生活の計画を立てる意味 ・卒業生の働き方を知る ・卒業生の大学生生活について知る ・自分の大学生生活について考える	・同じ興味関心を持っている同士で、自分のことについて考える場をつくる ・自分の強み弱みをエピソードに表現する ・1回～13回授業の振り返り	・大学生生活4年間をデザインすることの意味を知る ・将来を見通して大学生生活の目標を持つ ・大学生生活を充実させるための計画を立てる	・授業全体と自分自身を振り返り、自分なりに授業での学びを意味づける ・今後に向けての決意表明を行い、自分に自信をもつ

また、13回には「学ぶ力」自己点検を行い、1回と5回に付けた得点と比較しながら、自身の学習成果を自己点検できるようになっている。

#### 4. 学習意欲を高める取り組み

ケラー（2010）によれば、学習意欲に関連する概念は表5のように、4つに分類できる。これにより学習意欲の文脈において人の意欲をすばやく概観し、4つの領域それぞれにおいて意欲を刺激・保持するための方略をつくり出すことが可能になるとしている。

表5. ARCSモデルの分類枠・定義・下位分類

主分類枠	定義	下位分類
注意（Attention）	学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する。	A1 知覚的喚起 A2 探究心の喚起 A3 変化性
関連性（Relevance）	学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす。	R1 目的指向性 R2 動機との一致 R3 親しみやすさ
自信（Confidence）	学習者が成功できること、また成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをする。	C1 学習要件 C2 成功の機会 C3 個人的なコントロール
満足感（Satisfaction）	（内的と外的）報償によって達成を強化する。	S1 自然な態度 S2 肯定的な結果 S3 公平さ

「自立と体験1」を履修する様々な学生の学習意欲を高める取り組みについて、ARCSモデルを手掛かりに、現在の実施内容を4つの領域に当てはめて考察する。

##### 4-1. 注意（Attention）

表6. 注意（A）の領域の学習意欲を高める取り組み

	第一節	第二節	第三節
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少人数制の協同学習という他の大学の授業とは異なる手法を用いる。</li> <li>・他学部他学科の学生との交流の場をつくる。</li> <li>・毎回新しい手法を用いる。</li> <li>・短時間で区切って様々な手法を用いる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室を離れてグループで活動することで学習の雰囲気を変える。</li> <li>・大学について未知のことを知る機会をつくる。</li> <li>・グループ替えを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第一節・第二節と授業の進め方を変える（個人に焦点を当てる）。</li> <li>・第一節・第二節と取り扱うテーマを変える（キャリアデザイン）。</li> <li>・グループ替えを行う。</li> </ul>

「自立と体験1」の大きな特徴である他学部他学科の学生との交流、少人数制の協同学習は学生にとって目新しく、また模造紙、ポストイット、様々な意見共有の方法など毎回の授業手法により変化が組み込まれ、注意は維持される。何よりも他学部の学生の意見を聴くことで自分や他者を理解できる刺激は大きいと言えるだろう。

一方、どのような効果的な手法も繰り返すことで慣れてしまい関心を示さなくなる。体験学習の手法は効果的だが、

振り返りは毎回繰り返すだけでは機械的に実施するようになってしまう恐れもある。第三節でも高い出席率を維持することは継続的な課題であるが、慣れによる学習意欲の低下への十分な対策は、効果的な方策の一つと考えられる。

#### 4-2. 関連性 (Relevance)

表 7. 関連性 (R) の領域の学習意欲を高める取り組み

	第一節	第二節	第三節
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学び方を学ぶ」ことが今後の大学での学習に役立つことについての説明をする。</li> <li>・親和動機の高いメンバーにとって対話を楽しめる。</li> <li>・授業内で目標を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学を知ることの意味づけ。</li> <li>・ポスターのクラス代表選出。</li> <li>・グループでの共同作業による親和動機の満足。</li> <li>・自分に直接関係のあるルールやマナーを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容が今後の大学生活や卒業後に役立つことを説明。</li> <li>・現実の卒業生を取り上げた教材を使用する。</li> <li>・自分自身の個人アセスメント結果を教材として使用する。</li> </ul>

「自立と体験1」での学習がどのように役立つかという点については、授業の中で折に触れて説明しているが、学生のニーズ・欲求・願望と学習内容が一致しているかどうかは、常に検証が必要である。特に学生の多様性が大きく、今後変化していく可能性もあることを考えると、さらに重要性が高まっていくと考えられる。

#### 4-3. 自信 (Confidence)

表 8. 自信 (C) の領域の学習意欲を高める取り組み

	第一節	第二節	第三節
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回の授業で、授業内容、到達目標、評価基準、主な学習方法を詳しく説明する。</li> <li>・振り返りを行い、以降の場面で再度実践することで、小さな成功体験を実感する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちだけで行動することにより、自分たち自身の力で成功したことを実感する。</li> <li>・大学職員に取材することにより成功体験を得る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第三節は何を学ぶための授業なのかを改めて説明する。</li> <li>・クラス全体の前で個人発表を行い、比較的大きな成功体験を得る。</li> </ul>

授業の中のグループワークや発表などで成功体験を得ること、少しずつテーマや発表方法の難易度を上げ動機を持続させることは重要なポイントである。なお自信過剰なために学習動機が低いメンバーへの刺激については、さらに検討する必要がある。

#### 4-4. 満足感 (Satisfaction)

表 9. 満足感 (S) の領域の学習意欲を高める取り組み

	第一節	第二節	第三節
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに獲得した人間関係形成や自己表現の知識やスキルを使用する機会を提供する。</li> <li>・ポートフォリオに教員の励ましコメントを記入し、学習内容の価値を感じさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに獲得した人間関係形成や自己表現の知識やスキルを使用する機会を提供する。</li> <li>・レポート作成とコメントにより自身の成長や学習内容の価値を確認できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに獲得した人間関係形成や自己表現の知識やスキルを使用する機会を提供する。</li> <li>・授業単位の獲得。</li> <li>・自己の成長を実感できる。</li> <li>・継続的な交友関係の獲得。</li> </ul>

動機づけプロセスにおける最終段階の満足感は、個別差が大きいと考えられる。例えば、教員のコメントに満足する学生もいるだろうし、非常に努力したのに「合否」評価であることに不満な学生もいる。共通する要素としては、何らかの点で自己の成長を実感できたことによる内発的動機づけが考えられる。15回で実施している「私の大学生活宣言」は、教員からだけでなく、学生同士がお互いの成長を確認し合える機会として有効である。

## 5. 今後の課題

本稿では、学生の学習意欲を高める取り組みの中でも主に授業の内容や教材を取り上げた。共通教案はあるものの授業を担当する教員が多様であり、それぞれの工夫で授業を行っていることから、教員の働きかけ、声掛けなどのファシリテーションの方法については考察できなかった。実際はその影響は大きく、また各教員が様々な工夫を行っていることが授業の成果に結びついている点も多いと考えられる。一方教員の工夫が不足することで学習意欲を刺激できていないということもあるだろう。今後はファシリテーションの方法についても考察することで、さらに学生が主体的に学習する授業を目指したい。

### 〈参考文献〉

- (1) J. M. ケラー／鈴木克明監訳 『学習意欲をデザインする』 北大路書房 2010年